

“The Inverted Forest”

——見果てぬ夢を追って

新 田 玲 子

序——見えないものを見ようとする試み

1947年に *Cosmopolitan* に発表された “The Inverted Forest” は、約 24,000語に及ぶ作品で、寡黙な Salinger としては大作であるが、それにもかかわらず、この物語は作家自身にも批評家にも重要視されていない。その原因の一つに、Warren French 氏が、“The story, ...appears to have been ‘invented’ rather than ‘found.’⁽¹⁾”と批判しているような、物語の構成の無理が挙げられるだろう。例えば、人々が Ford の詩を求め、Bunny の作品は決して市場に乗らないという設定は、この物語の展開に重要な役割を果たしている。しかし、Ford の詩がやすやすと大衆や批評家の賞賛的になるようであれば、大切な森が地下にあるという Ford の主張そのものが崩壊してしまうし、そこに含まれる悲哀が喪失してしまう。また Bunny の話が、Corinne を引きつけて飽きさせない魅力を持っていたとされているのに、大衆をめぐらますることができないということも信じ難い。従って、物語の軸そのものが矛盾をはらんで、物語全体を虚構じみたものにしてしまっているのである。

作家の筆が成熟していない点は、物語の途中で語り手が Waner から Corinne に代わり、語り手の視点が変化するというぎこちなさにも窺われる。同様に、“There’s never just one reason for anything.”⁽²⁾という Ford の人生観が、“But the truth in its entirety seldom comes in one big

neat peace [sic].”⁽³⁾”となって、地の文に不用意に用いられたりすることも、作品の緻密さを減少させている。

このように、様々な欠陥が物語全体の評価を下げてはいるものの、この物語が軽んじられすぎてきたこともまた、真実ではないだろうか。というものの、この物語が書かれた年に、Salinger は後年の作品のモチーフとなる禅に関わりを持ち始め、この物語にもすでに禅的な発想が窺えるからである。そして、この物語の中で一見不自然に見える多くの事柄は、これら禅的な物の見方から生じた、物語の重要な要素であるように見えるのである。例えば Corinne が、事態を全面的に理解するだけの知性と、ウィットに富んだ人間性を持ち合わせている Waner の愛を拒み、極度の緊張と性格の偏りを窺わせる Ford に夢中になることは、一見信じ難い。だがそれは、作家が Corinne を通して、禅が説く非常に観念的な、見えないところに存在している Ford の本質の良さを賞賛しようとしているからだと思えることができる。また Ford が、優しい思いやりのある Corinne を捨てて、嘘の固まりの中で生きて行くことしかできない Bunny と駆け落ちすることも常識では考えられないことであるが、“You know I can’t get away. ...I’m with the Brain again.”⁽⁴⁾と Corinne に向かって断言する Ford の台詞から、Ford にとってはそれが必然だということが窺われるのである。しかも Ford の行為から、後期の作品の中でもっとも宗教色の濃い Seymour の矛盾した言動を引き起こした、常識を超える概念が読み取られ、形式的には未熟なこの物語の内容が、実は後期の作品の思想を反映させるほどに成熟していたと思われるのである。それ故、Gwynn & Blotner 氏はこの物語を、“...we have never been able to see this submerged forest for the mass of roots crawling about on the surface.”⁽⁵⁾と批判しているが、これは幾分安易な読みであり、物語はもっと綿密に読まれてしかるべきだと見受けられる。

そこで以下拙論においては、登場人物の行為と評価を比較しながら、一見すれば不自然な部分の再考を行う。そして、倒錯の森に住む者には自然

である、倒錯の森の隠された葉むらの部分を明らかにし、そうすることによって、この時点ですでに成熟していたと思われる、Salinger の作家としての基本思想を検証しようと思う。

Ford と Waner ——想像力について

登場人物のうち、まず Ford と Waner を比較してみると、Ford が “not a good mixer”⁽⁶⁾ と性格付けられているのに対し、Waner はユーモアのある極めて社交的な印象をもたらす。Waner のこの印象は、Ihab Hassan 氏が “a quixotic gesture”⁽⁷⁾ と呼んだ、Salinger の多くの登場人物が不都合な事態を円滑に進めるために用いる、独特の滑稽な行為から生じている。つまり Waner は、婚約指輪を受け取ってもらえなかったとき、指輪をバスの料金箱の中に落とそうとするし、Corinne が真夜中に電話してきたときには、“It’s all right. I wasn’t asleep. It isn’t even four o’clock.”⁽⁸⁾ と対応するのである。こういった場面における Waner の反応のばかさ加減は、愛情を拒否されて無惨に傷つけられた心の痛みや、眠っているのを邪魔された腹立たしさを紛らすと同時に、Waner を極めて人間的で好ましいものにしていく。

一方 Ford の方は、普通の人間ならば口当たり良く味付けをせずにはいられないようなコーンフレイクを、ミルクも砂糖もなしで食べる。⁽⁹⁾ この無味乾燥な個性は、現実がいかに殺伐としていようと、動じることのない Ford の性質を暗示している。実際 Ford は、“A poet doesn’t invent his poetry—he finds it, ...”⁽¹⁰⁾ と述べて、物の本質から目を反らさず、じっと見つめられることが、詩人、すなわち地下に埋もれた森の部分を見ることが出来る目利きには要求されていると主張する。このような Ford の視点からすれば、Waner の極めて人好きするユーモラスな態度も、所詮人為的な、本質をごまかした生き方にすぎないことになる。

Ford と Corine —— 治癒力について

Ford の世界は耐え難いほど殺伐としたものに見えても、物の本質に直に触れている。この特性の一つは、Waner が Corinne に、“poets almost never looking like poets because they would be infringing on the rights of all the chiropodists who are dead ringers for Byron⁽¹¹⁾”と、詩人の定義をする時に使用される、聞き慣れない“chiropodists”という単語によって、暗示されている。

“chiropodists”は治療する対象として「足」に深く関与する。この「足」は、“The Inverted Forest”の翌年に書かれた“A Perfect Day for Bananafish”において、Seymour Glass がしばしば問題にしている点である。「足」は Seymour にとって大切な象徴であり、Kenneth Hamilton 氏は、「足」を“universal mark of essential⁽¹²⁾”と定義し、John Russel 氏は、“...the connection between emotional balance and instinctive physical balance is not anything metaphoric, with Salinger.⁽¹³⁾”と、「足」と実際の精神の状態の密接さに注目している。“The Inverted Forest”の「足」も、Seymour の「足」と似かよった使われ方がされているようである。生い茂る森の葉むらが地下にあるならば、その森の「足」ともいえる根は現実の世界にある。しかも根は葉むらに栄養を与える大切な部分であるから、「足」は現実の中にある極めて精神的な部分を象徴していると思わせるし、森が倒錯しているのも、この「足」の部分が病んでいるからだと考えられるだろう。従って、倒錯の森を元に戻して、葉むらを地上に広げさせるためには、この森の「足」である現実の精神的な部分の病を治さなければならない。詩人を“chiropodists”と見なすことは、Ford のような詩人こそ現実の精神部分に深く関与し、この世界を健全なものに治せると、主張することである。

現実の誤りを正すことができるとする詩人の特質は、Corinne が Ford を好きになった原因と見られる出来事の中にも窺える。反ドイツの風潮の

時代に、ドイツ系である Corinne が他の子供達にいじめられているところに出くわした Ford は、首謀者の上着を窓の外に投げ出すことで Corinne を守ったのである⁽¹⁴⁾。勿論、Ford の抵抗は子供っぽく、弱々しいことは否めない。このことは、Bunny や母親によって代表される強い世俗の力の元では、Ford が無力であることをほのめかし、倒錯の森が正しく繁茂することは不可能な印象をもたらしている。しかし、現実の汚さと対立する力のはかなさこそ、Ford の正義を本物らしくしているのである。

正義感に加えて、Ford の本質には精神的な自由も含まれているようである。Corinne が11才の誕生日の夜、姿を見せない Ford を捜しに出かけた時、Ford は母親とともに町を離れようとしている。暗く凍えるような通りに出てきた Ford は、そこで航空帽を被る。

He took something out of his pocket, unfolded it, put it on his head and pulled it down over his ears. Corinne knew that it was his aviator's cap.⁽¹⁵⁾

この場面は実にさりげなく描かれているが、後に Corinne が Ford を思い出す時、おぼろに浮かびあがる少年の姿は、この時の航空帽を被った Ford の姿である。そこでは、Ford と、大地を眼下にして空を自由に舞うことができる飛行家のイメージとが重ねられており、何にもとられず、物の本質や実在の意味を眺望できる、Ford の広い視野を感じさせる。

こうした Ford の内面の世界は、多分に Corinne によって共有されている。まず、Ford 自身が想像力を持たなかったように、Corinne も事実にも密着する傾向があることが、“...her conversation stuck very close to the facts.”⁽¹⁶⁾という説明に窺える。また、Ford は、“I can't get past half my childhood dogmas.”⁽¹⁷⁾と、自分の中の成長しきっていない部分を認めているが、“...Corinne did not like to be touched unnecessarily.”⁽¹⁸⁾と描写されている、Corinne の性欲を拒否する傾向や、“...Corinne was making

private trips back to her childhood....⁽¹⁹⁾”という事実から、彼女が Ford 同様多分に子供の要素を携えており、十分な大人にはなりえていないことが暗示されている。さらに、彼女が雑誌社で過ごした最初の五年を表わす短い個人記録は、彼女が匿名で快く慈善をすることや、子供が通りを無事渡り終えたか見るために、タクシーの中で後を振り返る傾向を指摘し、彼女の性質の中には、Ford が中傷から彼女を守ってくれた時に彼女に与えてくれたような、暖かい思いやりがあることを示している。

このように、Corinne は Ford の性質を共有しているため、普通の人間的判断からすれば病的な Ford の一面も、Waner の人間的な性質では及ばない、飛行帽を被った、精神的に飛翔できる英雄だけが持ち得る魅力として映ったに違いないと、想像される。

Corinne と Waner ——人間性について

Corinne には、Ford を欲してやまなくさせるだけの Ford 的な性質がある一方、Waner によって“hat-straightner”と呼ばれる、全く別な一面もある。Waner が、Ford は Corinne にふさわしくないと説得しようとする場面で、彼は次のように Corinne に語り掛けている。

“Corinne. I remember a long time ago kissing you in a cab. When you first got back from Europe. It was sort of an unfair, Scotch-and-soda kiss—maybe you remember. I bumped your hat.” Waner cleared his throat again. But he put the whole thing through: “There was something about the way you raised your arms to straighten your hat, and the way your face looked in the mirror over the driver’s photograph. I don’t know. The way you looked and all. You’re the greatest hat-straightener that ever lived.⁽²¹⁾”

詩のような超俗的で精神的なものにしか興味の無い Ford と違い、Co-

rinne は帽子のような世俗的で外観的なものにも正しく注意を払える。それは Corinne を生き生きと見せる極めて人間的な要素であり、Corinne はそういう人間性を誰よりも多く持っている、Waner は指摘する。

この時 Waner は、Corinne とは対象的な Ford について、“He’s the most gigantic psychotic you’ll ever know.”⁽²²⁾とか、“He is cold. He’s cold as ice.”⁽²³⁾と述べ、Ford が人間の基準から外れている性質を批判している。この性質は詩と深く関係しており、Ford 自身、それに関わりすぎると、人間として生きて行く上で危険であると考えていることが、彼が詩に没頭していた時代を振り返って語る次のような台詞に窺われる。

“I’d nearly died looking for it [poetry]. It’s—it’s a legitimate enough death, incidentally. It’ll get you into some kind of cemetery.”⁽²⁴⁾

“some kind” が「人間的な」ということは明らかである。そして、Ford は以前ほどではないにしてもまだ詩と深く関わり続けているので、肉体を持った人間の生活から遠く隔たっていると思われる。従って、Ford 的な資質を持ちながらも、なお人間的である Corinne の本質は、この物語におけるすべての事態を理解しうるだけの知性と、人生を滑らかにしてゆくユーモアのセンスとを持ち合わせた Waner の本質と、基本的には同じであると見なされるべきである。

Ford と Bunny ——二極一致について

さて Warren French 氏は、Ford が Corinne を捨てて Bunny と駆け落ちした理由は、Corinne は自らも Ford 同様に無力であり、かつ現実的な一面を持っているので、Ford が倒錯の森に安住することを妨げたが、Bunny は Ford を苦しめることによって、精神的に現実から逃避させ、倒錯の森に住み続けることを可能にしたからだ⁽²⁵⁾と述べている。Corinne

は Ford を社交の場に引き出し、彼に人間としての生活を強いたことは確かであるが、彼女は決して Ford の詩作を妨げてはいない。一方、Bunny との生活では、Ford は酒びたりになっており、酒が見せる夢は、Ford の母親や Bunny の想像の世界と同じ幻想でしかないので、Ford がそこで本当の詩、言い替えれば現実の本性を見据えているとは考えられない。それ故、Ford が Bunny に引き寄せられた真の理由は、Corinne が Ford に自分と一緒に家に帰って欲しいと頼む時に Ford が言う、“I’m with the brain again.”⁽²⁶⁾ という台詞に、もっと良く現れているように思う。というのもこの台詞は、Ford が自分ではどうしようもない吸引力で Bunny に引きつけられて、しかも Ford とは全く違う性格の中に飲み込まれてしまっていることを明確にしているからである。

それでは、Ford と Bunny を引きつけた力は何だったのだろうか。考えられる可能性の一つに、二人に共通するたぐいまれな性質が挙げられる。Corinne が、Ford の超精神的な内面と、もっと人間的な内面とを持ち併せる、中途半端で矛盾した性質であるのに対し、Bunny にはある面で Ford と共通する純粹さがある。Paul Levine 氏は Bunny を、“...Bunny symbolizes Salinger’s society: the corrupt, materialistic, loveless world of the grown-up where adult and adultery are synonymous.”⁽²⁷⁾ と酷評しているが、Ford の詩を少しも理解せず、ただ彼が映画俳優の誰かに似てとてもハンサムだったから、彼と駆け落ちしたという Bunny の俗っぽさは、自分がいかに俗っぽいかということを感じきもしないほど徹底している。Bunny はまた、自分の必要に応じて行動するだけで、他人に対する思いやりは全くない。彼女のこのような利己主義は、Ford と駆け落ちした先に Corinne が現われた時の、彼女の詫びに窺うことができるほど、完璧なものである。

It was an apology. A rather wonderful one, in a way. It wasn’t delivered like any apology at all that a woman of thirty-three

might essay while standing up to her ears in richly assorted, conubial garbage. It was the apology of a very young salesgirl who has buttonheadedly sent the blue curtains instead of the red.⁽²⁸⁾

ここで Bunny の詫びが Corinne にはなかなか良かったと思えるのは、彼女の態度から罪悪感の薄さが示唆されているからである。つまり Bunny という女性は、Ford を奪うことによって Corinne をどれほど傷つけたかということ、ほとんど意識できないので、淡泊な詫び方に窺える無責任さの方が、凝った謝罪以上に、てらいの無い真実な気持ちを表わすからである。

このような逆説理論が成り立つほどに、Bunny の俗っぽさや利己主義は常識ある人間の枠を越えている。そして、まさにこの度合いの激しさで、Bunny の俗っぽさや利己主義は Ford の精神主義と一致する。実際 Bunny という名前は、bunny girl のような性的な物、すなわち Salinger にとっての大人の汚れた世界を連想させる反面、Mary の変形した名であって、純粋無垢な善の象徴である Virgin Mary のイメージを内在させている。それ故 Bunny は、世俗の究極と精神的な世界の究極との二極が、超人的な次元で一致した点に存在するものと見なせるのである。

ところでこのような二極一致は、Glass 家の中でも特に Seymour の行動を特徴付ける大きな要素である上、これ以後の Salinger の作品において、美しいものを賞賛するためにその美を傷つけてしまうとか、余りに大きな幸せを感じているから不幸な目に会わなくては正しくないとかいう形を取って、繰り返し利用される思想である。またこれは、James Lundquist 氏によって Salinger の禅的な思考として説明付けられているものでもあり、⁽²⁹⁾ Salinger においては決して異常な論理ではない。従って、Ford はこの共通の力のために Bunny に引き寄せられ、その結果、Ford とは全く違う世俗の強引さに、繊細な内面を抑えられてしまっていると考えるのは、極めて自然なことである。

語り手の存在——作家の立場について

今までのところ、人物の比較を通して、一見不自然に見える事態の必然性を説明してきた。次には、この物語をぎこちなくしている語り手の在り方が、どうして必要となったのかを、語り手の効果を参照しながら考えてみよう。

物語は大半三人称で語られるにもかかわらず、直接、間接的に、二人の語り手が登場する。全体の語り手は Waner で、彼は物語の途中で突如自己紹介をして、自分が語り手であることを読者に伝える。

I think I'll say here, and then let it go, that I am Robert Waner. I don't really have a good reason for taking myself out of the third person.³⁰⁾

語り手自身がさしたる必要性が無いと見なし、すぐに三人称の語りに戻って行くにもかかわらず、Waner が語り手であることを読者に知らせる効果は、Waner が語り手であるということによって、登場場面の少ない Waner の性格や意見に注目を促して強調し、作家自身がある程度 Waner の視点を共有していると示唆できることである。Waner は、Warren French 氏によって、*“he can both admire him [Ford] as a poet (which Bunny can't) and dislike him as a social creature (which Corinne can't).”*³¹⁾と指摘されているように、事態の両面を知的に理解できる唯一の人物である。その上彼は、事態を客観的に見つめながらも人間的な立場を守り続けているし、人間そうあらねばならないと主張する。これは、超精神的な Ford や、Ford に憧れる Corinne とは異なる、極めて人間的で物質的な生き方の賛歌である。従って、Waner の生き方が強調されれば、Ford を天才的な詩人とすることによって生じる超精神主義的な視点と逆行し、それとバランスを保つ視点が、作家の主張の一部として物語に付け

加えられることが可能になる。

ところで、物語は終盤で、突然 Corinne から Waner に宛てられた手紙の形式を取って、語りの直接の視点が Waner から Corinne に移行する。このような移行は、Waner の突然の自己紹介にもまして作品をぎこちないものにしてしている。しかしながら、この移行は非常に重要な意味を持っている。というのもこの移行の時点までに、Corinne は自分が抱いていた幻想にある程度気付き、語り手の役を果たせるだけ成長してきているが、それでもなお Waner ほど客観的な視点は勝ち得ておらず、依然 Ford に対する愛情や憧れを抱き続けているからである。そのため最終場面の Corinne からは、Waner には期待できない効果が生まれている。つまり、Ford の人間性を批判することなく、彼の追いやられた状態に対し深い同情が注がれているのである。これは、Ford が体現する非常に非現実的で超精神的な生き方に対して、作家に強い憧れがあることを示唆している。従って、作家が一方では Waner を語り手にすることによって、Ford と対立する人間的な立場を肯定しているにもかかわらず、他方では Ford のような人物のみが実現できる、本質に関わる生き方を捨てきれないでいるという、矛盾をはらんでいることが窺われるのである。

結論——見果てぬ夢を追って

表題に使用されている Ford の詩，“Not waste land, but a great inverted forest / with all foliage underground.”⁽³²⁾を、Eliot の “The Waste Land” と比較して、Warren French 氏は、Eliot は荒地に森を作る道を捜したけれども、“The Inverted Forest” では森は地下に在り、そこに手を伸べる方法は全く無い状況が描かれていると、否定的に解釈している。⁽³³⁾ Ford の生きている世界は、Waner や Corinne の生きている世界とは全く別のものであるという Waner の批判や、Ford 自身の破滅的な運命を考えれば、Ford の世界を突き詰めて行くことが、Bunny のような逆の力を引き寄せて、自滅の道を切り開く結果にならざるを得ないという運

命感が読み取れるので、French 氏の批判はある程度妥当なこととして受け止められる。

しかし、森が地下であれ、とにかく存在しているということは、全く何も良いものが無いという世界観よりも、希望的な一面を持っていると見なせることも事実である。実際希望が残されているからこそ、知性的には Waner を通して否定している Ford の生き方に対し、感情的な面から Corinne を通して同情できるのである。結局 Salinger にとっては、Ford の世界は見果てぬ夢であるように思われる。つまり彼は、Ford の試みた本質に関わって生きる生き方が、実現不可能な夢でしかないことを十分に認識しておりながら、それでもなお、そういった生き方を夢み、追いつけていたし、追いつけて行かなくてはならないと考えていたようである。

(註)

- (1) Warren French, *J. D. Salinger* (Boston: Twayne Publishers, 1963), p. 76.
- (2) J. D. Salinger, "The Inverted Forest," *Cosmopolitan* CXIII (December, 1947), p. 88.
- (3) J. D. Salinger, "The Inverted Forest," p. 92.
- (4) J. D. Salinger, "The Inverted Forest," p. 107.
- (5) Frederic L. Gwynn and Joseph L. Blotner, *The Fiction of J. D. Salinger* (Pittsburgh: University of Pittsburgh Press, 1985), p. 14.
- (6) J. D. Salinger, "The Inverted Forest," p. 74.
- (7) Ihab Hassan, *Radical Innocence: Studies in the Contemporary American Novel* (New Jersey: Princeton University Press, 1961), p. 262.
- (8) J. D. Salinger, "The Inverted Forest," p. 80.
- (9) J. D. Salinger, "The Inverted Forest," p. 92.
- (10) J. D. Salinger, "The Inverted Forest," p. 95.
- (11) J. D. Salinger, "The Inverted Forest," p. 85.
- (12) Kenneth Hamilton, *J. D. Salinger: A Critical Essay* (Grand Rapids: Eerdmans, 1967), p. 28.
- (13) John Russel, "Salinger's Feat," *Modern Fiction Studies*, 12 (Autumn 1966), p. 302.
- (14) J. D. Salinger, "The Inverted Forest," p. 76.

- (15) J. D. Salinger, “The Inverted Forest,” p. 77.
- (16) J. D. Salinger, “The Inverted Forest,” p. 78.
- (17) J. D. Salinger, “The Inverted Forest,” p. 88.
- (18) J. D. Salinger, “The Inverted Forest,” p. 79.
- (19) J. D. Salinger, “The Inverted Forest,” p. 79.
- (20) J. D. Salinger, “The Inverted Forest,” p. 80.
- (21) J. D. Salinger, “The Inverted Forest,” p. 90.
- (22) J. D. Salinger, “The Inverted Forest,” p. 90.
- (23) J. D. Salinger, “The Inverted Forest,” p. 90.
- (24) J. D. Salinger, “The Inverted Forest,” p. 86.
- (25) Warren French, *J. D. Salinger*, pp. 72-73.
- (26) J. D. Salinger, “The Inverted Forest,” p. 107.
- (27) Paul Levine, “J. D. Salinger: The Development of the Misfit Hero,” *J. D. Salinger and the Critics*, William Francis Belcher and James W. Lee ed. (Belmont, California; North Texas State University Wordsworth Publishing Company, Inc., 1962), p. 109.
- (28) J. D. Salinger, “The Inverted Forest,” p. 107.
- (29) James Lundquist, *J. D. Salinger*, (New York: Frederic Ungar Publishing Co., 1979), p. 88.
- (30) J. D. Salinger, “The Inverted Forest,” p. 79.
- (31) Warren French, *J. D. Salinger*, p. 74.
- (32) J. D. Salinger, “The Inverted Forest,” p. 80.
- (33) Warren French, *J. D. Salinger*, pp. 74-75.